

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 12章18～29節

¹⁸⁻¹⁹あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の聲に、近づいたではありません。²⁰彼らは、「たとえ獣でも、山に触れれば、石を投げつけて殺さなければならない」という命令に耐えられなかったのです。²¹また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。²²しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、²³天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、²⁴新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。

²⁵あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で神の御旨を告げる人を拒む者たちが、罰を逃れられなかったとするなら、天から御旨を告げる方に背を向けるわたしたちは、なおさらそうではありませんか。²⁶あのかきは、その御声が地を揺り動かしましたが、今は次のように約束しておられます。「わたしはもう一度、地だけではなく天をも揺り動かそう。」²⁷この「もう一度」は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。²⁸このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、畏れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。²⁹実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章5～26節

⁵それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。⁶そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

⁷サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。⁸弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。⁹すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。¹⁰イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」¹¹女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。¹²あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」¹³イエスは答えて言われ

た。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。¹⁴しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」¹⁵女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

¹⁶イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、¹⁷女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。¹⁸あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」¹⁹女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。²⁰わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」²¹イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。²²あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。²³しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。²⁴神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」²⁵女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」²⁶イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

「水をください」【こども説教のために】

主イエスが弟子たちと旅を続けていたときのことで、町はずれにある井戸辺で、主イエスは休んでいらっしやいました。近くにシカルという町はありましたが、入ることを避けられたのかもしれませんが。弟子たちが町に入り、食べ物を買って求めている間、主イエスは一人、井戸辺で休んでいらしたので、正午ごろのことで、きっと強い日差しが照りつけていたのでしょう。

そこに、一人の女性が水をくみに来ましたから、主イエスは、「水を飲ませてください」と声をかけられました。喉が渇いていたのでしょう。ところが、その女性は、不思議な顔をして言うのです、「わたしに、どうして…頼むのですか」と。そう応じた女性に、主イエスは不思議なことをおっしゃいました、「あなたが、わたしに頼むのです」と。主イエスが、「決して渇かない水」を与えてくださり、その人の内で泉となり、わき出るようにしてくださる、というのです。

主イエスが与えてくださるといふ「永遠の命に至る水」は、わたしたちにも与えられているのです。その「水」を受けとめる器を、わたしたちの中に設けましょう。手を差し出し、その「水」を注いでいただくのです。その「水」を受けとめた手は、「祈りの手」として合わせられるのです。

礼拝すべき場所

今日の主日聖書日課が前回与えられていた四年前の日曜日、わたしたちの教会は、三か月におよんだ「集まり自粛」最後の主日礼拝に臨んでいました。翌週には、主日礼拝に皆で集まることを再開しようとしていました。

わたしたちは、共に集まる場所として、会堂を、そして礼拝堂を、大切にしています。祈りの場としての営みが重ねられてきた礼拝堂には、確かに先達の歩みが刻まれているおり、彼らから受け継いだものに、わたしたちは大いに依存しているのです。それ無くして、今のわたしたちは無かったはずです。それにわたしたち自身の歩みを加えたものを、次に続く人たちに受け渡さずに済ませてよい理由は、ありません。先達から「受けたもの」を、先達にお返しするのではなく、次の者に「与える」のです。初代の弟子たちの教会は、「受けるよりは与える方が幸いである」（使徒 20:35）という主イエスの御言葉を心に留めて、自分たちが受けた以上のものを、続く者たちに与えようとしたのです。先達から受けたものに、わたしたち自身のものが加わるならば、わたしたちが与えるものは、受けたもの以上になるのが当然です。後に続く者たちが、わたしたち以上のものを受け、与えられることこそ、わたしたちの喜びであり、願いでもあるでしょう。そのためにこそ、わたしたちは、この共に集まる場所、会堂をも、礼拝堂をも、大切にしています。

「礼拝すべき場所」を、わたしたちは、先達から受け継ぎます。それが、永遠不変の場所ではないとしても、大切に受け継ぎます。たとえ何があっても、わたしたちは、それを安易に捨ててしまうことはないでしょう。

主イエスの時代、ユダヤ人にとって「礼拝すべき場所」は、何よりもエルサレムの神殿でした。町ごとに建てられた「会堂」も「礼拝すべき場所」として大切にされていましたが、それは時代を追って新しく加えられてきたものでした。ユダヤ人として先達から受けたものを確かめる場所として、エルサレムの神殿に代わりうるものはないと、彼らは考えていました。他方で、同じ神を信じてきたサマリア人にとって、その場所はエルサレムではなく、ゲリジム山でした。そこには、かつて神殿が建てられていたのです。主イエスの時代から遡って 150 年ほど前、エルサレムの神殿に仕える祭司らの率いる軍隊が、その山に建てられた神殿を破壊してしまうまでのことです。それが、サマリア人とユダヤ人の間を裂く決定的な楔となったのは、当然のことでした。だれも、その反目を責めることはできないでしょう。

「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」。それは、主イエスが願い、弟子たちに教え、実践しようとされてきたことそのものであったでしょう。エルサレムを「礼拝すべき場所」としてきた弟子たちにも、同じことを教え、導いていらしたに違いないのです。

ヤコブの井戸

主イエスが近くを通りながらお入りになられなかった「シカル」という町は、旧約聖書に出てくる「シケム」と同じ町だと言われています。「シケム」は、アブラハムも立ち寄った町として伝えられますが、何よりもヤコブと結びついた町です。ヤコブは、息子たちとエジプトに移住する前、シケムに住んでいたとされるのです（創世記 33:18 以下）。そこに祭壇を建てて礼拝をした、とも伝えられています。そのように伝えられる地だったからこそ、何百年か後、ヨシュアがモーセから託されたイスラエルの人々とこの地方に入植してきたとき、彼は、この地で人々と礼拝をささげ（ヨシュア 8:30 以下）、また彼らと最後の別れもしたのです（同 24 章）。

そこは、ゲリジム山と、向き合うエバル山とに挟まれた、谷間の地でした。けれども、谷川のほitori、というわけではなかったようです。そこで生きる者たちは、深い井戸を掘り当てて、水を得ていたのです。彼らは、いつしかその井戸を「ヤコブの井戸」と呼ぶようになったのです。かつてヤコブが息子たちと祭壇を築いた時代から、人々の命をつないできた水を絶えることなくわき出させてきた井戸。そのような井戸が、どれほど大切にされていたことかと思えます。それが、その地に生きる人々の「礼拝すべき場所」を確固としたものにしてきたのでしょう。彼らにとって、それは、「神の井戸」と言ってもよいものだったかもしれません。「ヤコブの井戸」は、「神の井戸」として、その山を「礼拝すべき場所」とする人々を生きし続けてきたのです。

しかし、「この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」のです。いいえ、すでに「来た」のです。「ヤコブの井戸」に代わる「父である神の井戸」を、主イエスがお与えくださったからです。

そのとき、主イエスの弟子たちはすでに、洗礼者ヨハネに倣って「洗礼」を授け始めていました（ヨハネ 4:1~2）。弟子たちは、その「洗礼」をヨルダン川ですることにこだわらなくなったのです。ヨルダン川の水ではなく、主イエスが与えてくださる「水」を得るようになったからです。その「水」が、与えられた人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出るようになることを、彼らは知るようになったからです。

「洗礼」に用いる水はわずかでも、そこには、汲めども尽きぬ「命の水」が注がれていることを、わたしたちも、洗礼を執り行うたびに確かめてきたのではないのでしょうか。その「命の水」のわき出る泉を、井戸を、わたしたちは、わたしたちの「礼拝すべき場所」で見ているのです。一つではなく、いくつも、ここに集められた者の数だけ。

主は、わたしたちにも「水をください」と問われるでしょう。この泉から、人々が「命の水」を汲みだすことができるように。